

第96号 発行日 2012.9.15

被災地 NGO 協働センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL: 078-574-0701 FAX: 078-574-0702

E-mail: ngo@pure.ne.jp

http://www.pure.ne.jp/~ngo/

人を救うのは人だ！！－Ⅱ

東日本大震災から1年と3ヶ月が過ぎた。被災者にとっての毎日の生活は想像を絶するような日々であった。

日本の災害史上でも最大となった巨大・広域・複合災害といえる災害だけに、そもそもわずか1年余りの月日では、ほとんど手がつけられない現実も理解してしまいそうだ。そんな中で、奇跡的にいのちを長らえた被災者たちは、その多くが低体温症、肺炎という震災関連死が1632名を数える実態を見ても明らかのように、劣悪な環境の中で避難所生活を送り、その後仮設住宅あるいは「みなし仮設」での不自由な暮らしを強いられて、今日までいた。誰もが表面では何もなかったかのように静かに暮らしているが、一軒一軒訪ね一步踏み込むと堰を切ったように、苦しい、辛い胸の内を訴える。一方で「復興」という空気が、紙蝶やテレビの画面から覆い被さり、ついていけない自分に焦りも感じながら耐えている姿を見受ける。

当NGOは、会員はじめ全国のみなさまのご支援を受け、この1年さまざまな活動を展開してきた。

①3・11から続けてきた山形県米沢市での福島からの避難者支援（生活クラブやまがた生活協同組合と連携。昨年9月末で終了）②岩手県遠野市に拠点をおき、「まけないぞう事業」の展開③神戸大学足湯ボランティアの後方支援④日本財団ROADプロジェクト事務局にスタッフ2名を出向⑤宮崎県新燃岳の野菜を東北の炊き出しに活用など、スタッフの増員もしながら持てる力をすべて出し切り対応した。

あまりにも広域の災害の前に限界を感じながらも、この1年間一生懸命取り組んできた。

さて、2年目に入った今年度は財政的にも厳しくなることを想定せざるを得ない。対策として、遠野を拠点として展開してきた「まけないぞう事業」は神戸からのサポート態勢に切り替え拠点を撤去、日本財団へのスタッフの出向は0.5人の減、宮崎・東北のプロジェクトは今持っている資金範囲で行う。など緊縮財政をとりつつ、対応せざるを得ない。

とはいっても、福島に関連するさまざまな問題に対して長期的な取り組みを覚悟し、対応していかなければならぬ

と決意をしている。ただ、あまりにも課題は山積しているので、あれもこれもと取り組むわけには行かない。福島からの県外避難者に「まけないぞう」の作り手になって貰ったり、足湯ボランティア活動の継続から、今後の対応策を考えたい。

というのは、これまでの足湯ボランティアで集めた被災者の声、まけないぞうを通して集めた被災者の声が大変重要なメッセージがあることに気づいてきた。先述したROADプロジェクトで集めたつぶやき（被災者の生の声）は、1万件に達した。今、このつぶやきを東京大学被災地支援ネットワーク（代表似田貝香門・東大名誉教授）とタイアップし、分析を委託している。

もちろん、こうして集めた被災者の声も氷山の一角でしか過ぎない。しかし、つぶやきをつぶさに読んでいると、被災者にとって足湯ボランティアの存在が大変大きいことが伝わってくる。

当NGOは、阪神淡路大震災以来、「最後の1人まで救う」と掲げ、この17年間続けてきた。この理念は忘れないでおきたい。そのためには、やはり一人ひとりの声に真摯に耳を傾けることが大切であると考え、またその手応えも感じてきた。

他方、被災地ではまだまだ水産・農業の再建は全く展望が見えない状況である。でも、そんな中で唯一の光は、「被災地応援ファンド」という形で、小さな事業者を支える仕組みが増えつつあること、また、発災直後から大活躍したツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディアも、現在も活躍していることが挙げられる。

こうして小さな取り組みかも知れないが、巨大災害を前にして、だからこそ目の前の課題を丁寧に対応することを基本姿勢としたい。このことは「ゆめ風基金」が直後から、たった一人の孤立した障害者をサポートするために東奔西走していた行動から学んだ。従って、昨年度の基本方針でも掲げた「人を救うのは人だ！」を忘れないでいたい。

2012年7月7日総会基本方針より

代表 村井雅清

～おわり～

本誌「じやりみち」の発行が遅れ、ご迷惑をおかけしています。2012年度総会も無事に終え、ここにやっと発行の運びとなりました。これまで同様、よろしくお願いします。

2011年度 被災地NGO協働センター 事業報告

~2012年7月7日 当センター会議室にて総会を開催~

1. 寺子屋事業

東日本大震災の救援活動に手一杯でなかなか寺子屋事業を企画できなかったが、直接に救援活動に関わっていない福島のことを考える為の寺子屋を実施した。

・寺子屋セミナー4回シリーズ（3回、4回は2012年度）

「福島の再生のために」フクシマ」と向き合おう！」

第1回（2/21）「水俣から福島へ」 講師：谷洋一

第2回（3/18）「自然と共に生きる自給自足の暮らし、

そこに訪れた原発災害」 講師：大塚愛

第3回（4/7）「東日本大震災と私たち」

講師：神戸松蔭女子学院大学・池田清ゼミ生

第4回（4/27）「哀れな被災者のままではいられない！」

講師：藤田浩志

・特別編（12/11）「ひとりの修行僧として」鈴木隆太

2. まけないぞう事業（詳細後述）

1997年から始まった本事業。東日本大震災の被災地でも「まけないぞう」づくりが始まり、被災者に喜びと希望を運んでいる。

3月までに、作り手さんは60名に上り、まだ増えつつある。一方、避難先の米沢や新潟で作り方を習って福島に戻った方、宮城県で講習を受けた方など福島・宮城の作り手さんも10名ほどおられる。被災地で広がるまけないぞうが新聞、テレビなどで取り上げられ、注目を浴び、全国から注文が殺到し、一時期は生産待ちの状況だった。しかし、3月以降は注文が少くなり、生産過多気味なので、販売戦略を考える必要がある。

3. 災害救援事業

3月11日に発生した東日本大震災に対する支援活動の詳細は後述。

当センターが事務局を努める「KOBE 足湯隊」は、主に能登半島（2007年地震発生）・兵庫県佐用町（2009年水害発生）・和歌山県那智勝浦（2011年水害発生）などの被災地に出かけている。東日本大震災では、発生直後から当センターのスタッフと共に1、2名が東北に入り、直後の避難所で足湯ボランティアを行った。その後、随時、神戸大学のボラバスで東北に入り、仮設住宅でも足湯を行っている。

集めたつぶやきを分析して心のケアや復興のあり方についての提言につなげる試みで「つぶやき研究会」を立ち上げた（JR西日本あんしん社会財団の助成）。

日本財団ROADプロジェクトと震災がつなぐ全国ネットが協力し、東京から足湯隊を送り出している。「昨年3月から1年、約130ケール、のべ1500人のROAD足湯ボランティアが被災地で活動を行いました。」とのこと。約1万のつぶやきを集め、東大のグループによる分析が始まっています。

佐用町の復興支援として、2011年度は、トヨタ財団の助成を受け、佐用町奥海地区で「兵庫県佐用町の山林整備を通して地域における学びの場、育ちの場を形成する人材育成プログラム」を実施した。これはふれあい喫茶・足湯活動・フィールド研修・座学・木工教室などの活動を「奥海の森 地元学実践塾」のプレ講座として捉え、奥海で暮らす住民との関係醸成を重点課題とするものである。しかし、実施直前に東日本大震災が起こり、担当予定のスタッフや講師が震災救援にかかりきりになたので、新メンバーでプログラムを縮小しての実施となった。また、2011年度、2012年度の2年間の助成を申請していたが、2011年度で終えることにした。

また、静岡県で開催している（2011年で7年目）「東海地震などを想定した広域連携図上訓練」のリーダー的役割として今年度も参画し、スタッフの頼政も若手リーダーとして準備段階から参画した。

海外災害への支援活動については、CODE 海外災害援助市民センターの事務局をサポートしてきたが、2011年度は東日本大震災にかかりきりで、むしろCODEからスタッフ2名を半年間出向していただき、集まった募金も全額寄贈して頂いた。支えて頂いたことに感謝したい。

4. 提言（アドボカシー）・ネットワーク事業

一つは岩手県遠野市での初期の活動が、広域・巨大災害時の「後方支援」の意義を見出し、NHKが再々放映したことも手伝って、社会に大きなインパクトを与えた。二つ目には、阪神淡路大震災から継続してきた足湯ボランティア活動とまけないぞう事業が、この被災地でも展開され、どちらも注目を浴びた。中でも、すでに触れたが足湯活動から集めた「つぶやき」は1万件に達し、東京大学被災地支援ネットワークとの連携で、これを分析し、政策提言に繋げる試みに挑戦してきた。一方、「つぶやき」を聞いたその時点で現場に返すために、地元行政、社会福祉協議会、生活支援相談員などを交えて、どのように「つぶやき」を生かすかの検討が始まった。（宮城県七ヶ浜）

三つ目は、まけないぞうや足湯を通しての被災者の声に耳を傾けると、明らかに「心のケア」の役割をしている。このことは今後、精神科医、臨床心理士、保健師、カウンセラーなど専門家に大きな影響を与えるだろう。ただし、このことはすでに17年前の阪神淡路大震災後に設置された「ひょうご心のケアセンター」初代所長中井久夫先生が予見していたことである。四つ目は7年前から続いている「東海地震等に備えた図上訓練」から生まれた「災害ボランティアネットワーク」によって、災害時に被災地に置いて、ボランティアと地域、ボランティアと社会福祉協議会、ボランティア+地域と行政、ボランティア+地域+行政と政府などを「つなぐ」役割をする「リエゾン・キーパーソン」が育ち、東日本大震災で大活躍。このリエゾン・キーパーソンの存在が大きく注目されるようになった。ちなみにこのリエゾンチームは、20代～40代前半の若者で構成されている。

5. 広報活動

本誌「じやりみち」の年2回発行やホームページでの活動報告更新などによって、会員間の連携と協働の充実を図るとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。

HPの充実化については、活動レポートを即日ブログにアップすることにより、HPの更新がほぼ毎日のようにはかれている。東日本大震災後の対応として英語のページもできた。

4. その他

代表の村井が第21回ロドニー賞を受賞し11/30に受賞式があった。また、12/13にはロドニー賞を祝う会を開いて頂き50名近くの方にお越し頂いたことを感謝と共に報告いたします。



東日本大震災 被災地支援 活動報告

3月11日に発生した東日本大震災により亡くなられたお一人おひとりのご冥福をお祈りすると共に、ご遺族の方々にはお悔やみを申し上げます。そして、被災された皆様、福島原発の事故により避難されている皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

被災地 NGO 協働センターは、この度の災害を受け、震災で気づいた支えあい、学びあい、寄り添いという原点にそって、被災された方のいのちと暮らしに寄り添う支援を行っています。以下に、東日本での支援活動について、ご報告させていただきます。

【これまでの活動内容】

1. 初動対応～拠点サポート

- ◆状況調査：地震当日の3月11日に先遣隊を派遣し、宮城・岩手・山形県等において状況調査を実施。
- ◆避難所・ボランティア拠点運営サポート：山形県米沢市(2011年3月14日から9月末まで)と、岩手県遠野市(2011年3月25日より2012年4月6日まで)にスタッフを派遣。

※山形県米沢市では、福島からの避難者支援を生活クラブやまがた協同組合と連携して行いました。

※岩手県遠野市では、日本財団 ROAD プロジェクトの拠点として設置したボランティア宿泊所「まごころ寮」を静岡県ボランティア協会と共に管理運営に当たりました。



この拠点で、ROAD 足湯隊をはじめ、KOBE 足湯隊、不良ボランティア・ボランティアバスなどを受け入れ、サポートしてきました。なお、ROAD プロジェクト事務局(東京)にも、スタッフ2人を1年間出向させました。

2. 「足湯」ボランティア

たらいにお湯をはり、足を浸けてもらうことで心身共にリラックスしてもらう活動。冷えた体を温められるほか、

ストレスや全身の疲れを軽減させる効能もあるとされます。阪神・淡路大震災のときに始められ、新潟県中越地震や能登半島沖地震などでも脚光を浴びました。

リラックスすると不安やニーズを口にされることがあります(これを「つぶやき」と呼んでいます)被災者の SOS のサインを早めにキャッチしたり、暮らしの再建につながるニーズを代弁・提言することに努めています。山形県米沢市や岩手県沿岸部の被災地(大槌町、陸前高田



市、釜石市、大船渡市ほか)などで実施。仮設住宅での孤立を防ぐためにも足湯による寄り添

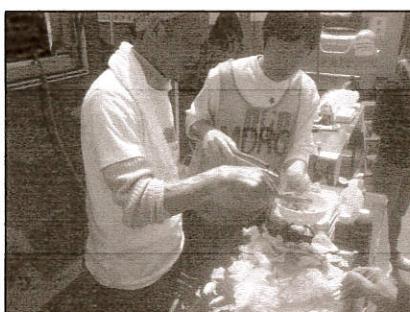
いを続けています。

また、足湯で集めたつぶやき(被災者の声)は、大変重要なメッセージであると気付き、ROAD プロジェクトの1万件のつぶやきの分析を東大被災地支援ネットワークに依頼しています。

3. 野菜サポート

～被災地から被災地へ、支援のリレー 第1段～

2011年1月の新燃岳噴火の被害を受けた宮崎の農家さんから野菜を購入し、東日本大震災の被災地での炊き出しや避難所での自炊、在宅避難者の食事材料などとして使っていただいている。宮崎の農家さんの収入につなげるとともに、避難所等で不足しがちである新鮮な野菜を提供。また、被災地(宮崎)から被災地(東日本)へ、「応援していますよ！」のメッセージを運び、被災地どうしの痛みの共有や励まし合いを目指し



▲2012年4月29日、スポーツサポートの方々が、新燃岳の野菜で炒め物等の料理を振る舞いました。(宮城県気仙沼市)

ています。2012年6月末までに、40ヶ所(岩手、宮城、福島、山形、千葉県内の各所)以上に約1790便、箱数にすると8600箱以上を送付しました。

なお、2012年8月末でこの事業は終了しました。

4. アレルギー対応粉ミルク支援

アレルギー対応用の粉ミルクを広く市民の方から募り、それを必要とする避難所や施設等に提供。2012年7月末までに、35回以上に渡って合計2,100缶余りを、北海道、岩手、宮城、福島、山形、新潟、福井県内の避難者に送付しました。

5. 「まけないぞう」づくり

～被災地から被災地へ、支援のリレー 第2弾～

2011年3月末から各地の避難所、仮設住宅で実施。もともと被災地KOBEの「生きがい・仕事づくり」として、阪神・淡路大震災当時の仮設住宅にお住まいの方のアイディアから生まれた活動で、ぞうの形をした壁掛けタオルを被災者がつくります。



ります(スタッフが1ヶ月に一度、遠野に通います)。

詳しくは「ぞう通信」をご覧下さい。

また、「まけないぞう研究会」を東大被災地支援ネットワークの中に設置し、こうした被災地グッズの活動が持続可能な事業になるか、かつもう一つの経済のあり方を模索するために調査・研究をしています。

6. 「竹炭を送ろう！」

～被災地から被災地へ、支援のリレー 第3弾～

2009年の水害で被害を受けた兵庫県佐用町から「竹炭」を東日本に運ぶ取り組みを開始しました。佐用町水害のあと、私どもは「被災地に炭を！」を合い言葉に全国のみなさまに「炭」のご提供を呼びかけました。炭は

脱臭・調湿に効果があると言われています。当時全国60ヶ所から総計15トンをご提供いただき、浸水した家の床下に入れていただいたところ、たいへん喜ばれました。今度はそのお返しに、佐用町から東日本へ。炭が応援のメッセージを運びました。

また、当センターのコーディネートで、佐用町で伐採した木材を神戸学院大学の学生が加工し、名取市の仮設住宅にベンチや収容棚を取り付けました。

【今後の活動】

1. 仮設住宅における暮らしの支援

仮設住宅で被災者が孤立しないよう、暮らしのサポートに重点をおいて活動してまいります。具体的には、上記タオル手芸品「まけないぞう」づくりによって被災者の生活に寄り添い続けます。

また、もとのコミュニティがまとまって仮設住宅・復興住宅に入ることだけでなく、現時点から先を見据えて仮設住宅内の住民自治を高め、安心して暮らせる環境をつくることが不可欠です。こうした仕組み作りを促進するため、「震災がつなぐ全国ネットワーク」の分科会として誰でも参加できる「仮設支援連絡会」(事務局:日本財団ROADプロジェクト内)を立ち上げて連携しています。

2. 福島の支援

さらに、福島の被災者の抱える問題がより長く深刻になってきます。福島の方は特に、原発事故のせいで家に帰る目途も立たず、もとの地域からバラバラに避難され、つながりを断ち切られています。最後まで「福島」と向き合い、福島の人たちと人間回復ができるまで寄り添っていきます。



2012年3月11日
被災各地で追悼行事
が行われた(写真は釜石市の仮設住宅)

ぞう 通信。

第47号 2012.9.15

発行所: 被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL: 078-574-0701 FAX: 078-574-0702 <http://www.pure.ne.jp/~ngo>

3.11の東日本大震災から1年半を迎え、この間みなさまにはたくさんのお心温まるご支援を頂きました。17年前の阪神・淡路大震災から「まけないぞう」が生まれて、早15年が経ち、これまでに全国・全世界に飛び立ったぞうさんがなんと20万頭を達成しました。この場をお借りしてみなさまに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございます。

東日本大震災から1年半……

3.11の東日本大震災から1年半を迎えました。この間あつという間なような、長いようなそんな気がします。2011年3月11日午後2時46分に国内観測史上最大の揺れが発生し、東日本を最大40m以上の津波が人々を、家を、すべてをさらっていました。犠牲者は15,870名、行方不明者は2,814名になりました。(9月11日現在)

人々は、真っ暗闇のなか、山を越え、ずぶ濡れになった身体を震わせながら、支え合い、炊き出しをし、道路を確保し、救助の手を待っていました。私たちが見た光景は、これまでにない悲惨さで、過酷で、津波の脅威をさまざまと見せつけられ、言葉を失い、どうしていいかわからなくなりました。それでも人々は、どん底に突き落とされながら、時を刻みながら前に前に進んでいく、そのひたむきな強さをまた改めて感じました。

「まけないぞう」は3月26日に大槌町の避難所に入りました。当時多くのボランティアは瓦礫撤去・物資の配給などハードの活動が多く、避難所は水・食料・毛布などを求め殺伐とした状況が続いていました。そんな厳しい状況のなかを、タオルと針箱を抱え、被災地へ入りました。ボランティアの方には、「いまこんなことより、もっとやらなければならぬことがあるのでは」とご批判も頂きながら、自分自身も悲惨な現場を前にして、正直躊躇しながら、避難所に入りました。

しかし、そこで聞こえてきたつぶやきは「2週間ずっと津波のことを考えていたけれど、何もかも忘れて夢中になって、久しぶりに津波のことを忘れられたわ」、「今日ははずいぶん頭を動かしたから、今晚はよ～眠れるわ」「久しぶりに針をもったわ、いつもなら家に帰ってくると、針仕事していたけど、全部流されたから」というものでした。間違っていない!と確信した瞬間でした。そして、足湯も「足湯って? ?」という感じでしたが「久しぶりに足だけでもお湯につかって、2週間お風呂に入っていなかったから気持ちいい」など、気付くと私たちの後ろには、靴下を脱いで大勢の被災者の人たちが並んでいました。それから、ぞうさんと足湯で一緒に回りました。

そのうちに遠野でお針サークルをしている「かかしの会」の



女性たちが「こんな年をとった私たちでもできることはないか」ということで、裁縫という特技を生かして「まけないぞう」の活動にメンバーが毎日交代でお手伝いしてくれるようになりました。普段は主婦や畠やら忙しい中を朝から晩まで一緒に活動してくれました。私にとって、東北弁もよくわからず最初はほとんど聞き取れないくらいでしたが、この人たちのお陰で、通訳もしていただいて、地元の人も話しやすく、被災者の人たちとの会話も弾みました。

そして、8月のお盆を目処に避難所が解消され、仮設住宅、みなし仮設へ在宅へとみなさん移っていました。仮設では、当初集会所がないところが多く、以前のコミュニティがバラバラにさせられ、「まるで外国へきたみたい」と隣近所との交流がありませんでした。そして、ボランティアはテントとイスと足湯セット、お茶っこセットを持って走り回りました。そして、テントを広げると、住民の方が集まり、交流が持てます。津波から半年近くなる中で、その「場」で「あ～久しぶり、あんた生きてたの、どこにいるの? ? 私この仮設だよ、私もよ」という安否確認ができたのです。また、「お茶っこだけだと話しづらいけど、ぞうさんをしていると気を使って話さなくてもすむ」とその「場」に参加しやすいそうです。そして「鼻が曲がったあ」「それは性格が曲がっているからよ」「私のはめんこくない」「お母さんに似たのよ」など自然に言葉を交わし、笑みがこぼれます。「あ～久しぶりに腹の底から笑ったあ、仮設のなかで一人で何もする事もなく、ぽーっとしていてもつまらないからね」とみんなが集える、その「場」の大切さを感じます。

なかには、避難所でぞうさん講習会を2~3回うけ、あとは自分のスペースでぞうさんをつくっている人がいました。仮設に移ってから、話を聞くと、大槌でお孫さんが津波に流され、遺体はすぐに見つかったけれど、火災の影響で真っ黒に焼けただれていたそうです。最後になでてやりたかったけど、皮膚が剥がれ落ち、なでることすらできなかったそうで、もう一度抱きしめてやりたかった。そのことで取材責めにあい、最初の内は素直に取材にも応えていたそうですが、そのうち話すのが嫌になって、すべて断ったそうです。

それで同じ被災者の人とはなしていたら、同じ被災者でも背

景がひとり一人、温度差を感じる誰とも話さなくなり、避難所で悶々としていたら、「まけないぞう」に会って、それから夢中になってぞうさんをつくったそうです。「本当にあのときはぞうさんに救われたんだよ」と…

現在は、みなさん仮設住宅や在宅などでぞうさん作りに励んでいます。作り手さんのつぶやきを紹介します。

「東日本大震災より、もう1年3ヶ月が過ぎます。あの日あの時は一生忘れられない事です。家と共に津波に流され、気を失っても何とか助けて頂きました。入院2週間一人仮設に入所して、このぞうさん作りを始めました。神戸の方々には本当に感謝しています。遠い所より高田の被災地へと足を運んで頂いています。私も23年10月よりぞうさんを出させて頂いています。何度も頭の先を固く作るようにと言われて勉強しながら作っています。主人を津波で亡くして、時には主人の夢も見ます。帰らぬ人を忘れようと、ぞうの顔を形を考えながら作っている時が何にも考えず、忘れる時間です。ま

けないでがんばります。」

「高台移転や土地の売買について、いろいろ聞かれるけど、まだそんな気になれないんだよ。辛いことや悲しいことがあると、元家があった所へ行って、残された土台の上に座ってぼーっとしているんだよ」

被災者にとって、1年半それぞれの時が刻まれています。津波で助かったせっかくの命を自ら断つ人、人知れず亡くなる方、被災地は悲しいこと、悔しいこと、憤りを感じながらの生活が続いています。それでも「まけない！」という気持ちを振り絞って前に歩みを進めています。どうぞこれからも被災地を、「まけないぞう」を応援して下さい。よろしくお願ひします。

「まけないぞう」事業担当・増島智子

～支援者のみなさんの動き～

「一本のタオル運動」を通して、各地からタオルが被災地へ届けられています。ただ、その送られてきたタオルをそのまま被災地へ届けるのではなく、一度仕分けをしています。その仕分けのお手伝いをしてくれているが、TPOという神戸市西区にある企業です。阪神・淡路大震災で被災した企業で、社員の方も被害に遭いました。その時に全国・全世界から応援を頂き、ぜひ今回の東日本でお礼をかねて何かできないかと、会社の一角を借りて、有志でアフターファイブにタオルを仕分けしてくれています。これまでの仕分けタオルの総計は約67,000枚です。彼らの協力がなければ、こんなにたくさんのタオルを仕分けることはできませんでした。また最近では、「まけないぞう」のアンテナショップを展開してくれていて、明石市・東灘区など、、、いつかあなたの街でもぞうさんに出逢えるかも知れません…



東京を中心として、海外へ展開中の強い見方である「makenaizone」のみなさんは主宰者は東京のペインクリニックのA先生、その先生を取り巻く患者さんや友人、知人関係のみなさま方がホームページを立ち上げ、facebookも立ち上げ応援してくれています。またメンバーにはドキュメンタリー監督の我謝京子さん(ロイター記者)がいて「311:ここに生きる-In The Moment」という「まけないぞう」を取り上げた映画も上映中です。(東京上映会)

<http://www.facebook.com/events/456070294426467/>

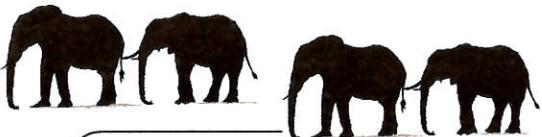
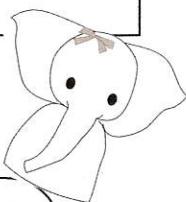
東京から世界へ「まけないぞう」が飛び立っています。詳しくはこちらのHPをご覧ください。
(<http://www.makenaizone.jp/?cat=4>)

～支援者からのメッセージ～

「まけないぞう」が被災地の方々の心と日本中の世界中の人の心をつないでいるのが、すばらしいと思いました。私たちにできることはちょっとだけれど、私のタオルがステキなぞさんになれますように！！よろしくお願いします。

ご支援して頂いているみなさんにこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。今後とも「まけないぞう」と一緒に育てて下さい。

お世話になっております。先日は注文した「まけないぞう」10頭を早々にお送り下さり、ありがとうございました。とてもかわいくて、気に入っています！「まけないぞう」のタオルを同封させていただきます。かわいいぞうさんたちが新たに生まれることを楽しみにしています。お役に立てました幸いです。今後ともよろしくお願いします。



「まけないぞう」からのお願い！！

いま被災地へ送るタオルが足りません。家に眠っている新品のタオルがあれば色柄モノは問いませんので、ぜひお送り下さい。また「まけないぞう」の作り手さんも増えつつあり、たくさんのぞうさんが生まれています。ご注文もどしどし承っていますので、販売へのご協力お願いします。



Thank you